

## アベイヤ司教 着座式ミサ 説教

第一朗読 イザヤ 6・1-3a

第二朗読 テモテへの第二の手紙 1・6-14

福音朗読 ヨハネ 21・15-17

今日は、こういう形で新しい福岡司教の着座式を行わなければなりませんでした。新型コロナウイルスの今の状況の中で、他に方法がありません。しかし、わたしたちは、福岡教区のすべての兄弟姉妹と心をつなげて、ここに集っています。信徒、司祭、修道者一人ひとりとの絆を深く認識して、福岡教区のこれからの歩みの上に天の父の祝福を祈ります。

また、高見大司教様を迎えて、わたしたちの長崎教会管区だけではなく、全日本の教会とのつながりを深く感じます。高見大司教様、ありがとうございます。また、今日はいらしてください、福岡教区の宮原名誉司教様と長崎教区の中村補佐司教様に心から感謝いたします。

今日朗読されたみことばを心に留めて、その中からわたしたちのこれからの歩みを照らす光をいただきたいと思います。ヨハネの福音書で伝えられているエピソードが読まれました。皆様が開きなれている場面です。復活されたイエスとペトロの出会いを伝える福音の箇所です。その話の中に三人が登場します。

まず、弟子たちに会うために彼らのいるところに向かいに行くイエスです。イエスは、弟子たちとともに食事を分かち合ってから、ペトロに質問します。「ヨハネの子、シモン、わたしを愛しているか。」三回にわたってイエスは質問されます。この問いかけの大切さが示されています。

二番目に、最後の晩餐の時にイエスのために命を捨てる覚悟ができていると宣言してから、何時間も経たないうちに三度もイエスを知らないと言ったペトロです。イエスが十字架につけられて亡くなられて、イエスがなくなって、ペトロは前の生活に戻るしかないと思って、自分の故郷に帰ってしまいました。しかし、イエスにもう一度出会う喜びを味わいながら、イエスの質問に対して謙虚に答えているペトロです。「主よ、あなたは何かもご存知です。わたしがあなたを愛していることを知っているはずです。」試練に清められた心から生まれてくる信仰告白です。

そして、イエスが心にかけていらっしゃる兄弟姉妹です。ヨハネの福音書の最後の晩餐の記録に書かれているように、イエスはこの兄弟姉妹を「この上なく愛し抜かれて」彼らのために自分の命を捧げられたのです。イエスは彼らのことを「わたしの羊」と呼んでおられます。イエスは、この羊の世話をペトロに頼みます。今は、ペトロは準備ができています。自分の弱さを体験す

ると同時に、イエスの深い憐れみをも新たな形で体験したペトロだからです。ルカの福音書で伝えられているように、自分を知らないとして三度も誓ったペトロへ向けられたイエスのまなざしは、ペトロを救ったのでした。今は、兄弟姉妹の弱さがわかることのできるペトロになりました。今は、この兄弟姉妹を支える準備ができています。ペトロです。「私の羊の世話をしなさい」とイエスは仰います。実際に、イエスは、ガリラヤの湖のほとりで初めてペトロに出会った時と同じ招きです。「私についてきなさい」。それから「あなたを、人をすなだめる漁師にしよう」と。

このイエスとペトロの対話を通して、ペトロやペトロと同じように共同体の奉仕者として選ばれた人の生き方の基本が示されていると感じます。それは、まずキリストとしっかりと結ばれていることです。そして、他の人々のために生きることです、自分のすべてを捧げることです。

ただ、パウロが先に読まれたテモテへの手紙に書いているように、この生き方が可能にするのは、自分の努力ではなく神の恵みのみです。朗読されたイザヤの預言のことばにありました。「主なる神の霊がわたしをとらえた。」この「霊」は、天の父の心に満ちている愛と慈しみの霊です。また、イエスの心にも満ちている愛と慈しみの霊です。この霊に心を開くときに、イエスが求めておられる羊の世話をする羊飼いになるのは初めて可能になります。この霊に導かれて、虐げられた人々、圧迫されている人々、貧しい人々を心にかける牧者になれます。そして、イエスが示された道を共に歩むようにと、すべての人を招く牧者になることが初めてできるのです。

イエスとの深いつながりがあれば、人々への深い愛が生まれてきます。牧者に求められているのは、この二つの愛です。何年か前に、ある集いで奉獻生活の基本を説明しようとしたときに、それは「キリストと人類に情熱をかける生き方」であると言われました。まさに、牧者の生き方の基本です。「キリストと人々に情熱をかける生き方。」きょうの第二の朗読として読まれたテモテへの手紙の中で、こういう生き方の特徴を述べています。心に留めたいことばです。

先週ずっとこういうみことばを黙想してきたのです。福岡教区へ司教として派遣されて、何が本当に大事にすべきかを主の前に何回も考えたのです。最終的にこれに尽きると感じます。「キリストと人々に情熱をかける生き方です」。パウロは別のことばでテモテに同じことを言っています。「私の手を置いたことによってあなたに与えられている神の賜物を、再び燃え立たせてください」と。

教皇フランシスコは、使徒的勧告『福音の喜び』の中にこのようにのべられています。「福音宣教とは、イエスへの熱意であるとともに、イエスの民への熱意です。」そして、さらに「イエスは、民の中にいるわたしたちを捕らえ、民の中へ送り出すのです。ですから、この民の一員であるということを抜きにして、わたしたちのアイデンティティを了解することはできないのです」(『福音の喜び』268)このように、キリストの愛に駆り立てられて、ともに歩んで行きたいと願っていま

す。わたしたちの教区の共同体は、社会の中にあって、本当に神の国を証しし、のべ伝えるように主に派遣されています。しっかりと、この使命を受け止めて、忠実に応えていきたいと思えます。また、教皇フランシスコのことばですが、「キリスト者たちは、誰をも排除することなく福音をのべ伝える義務を負っていますが、それは、新たな義務を人に課するようなものではなく、喜びを分かち合い、美しい地平を示し、誰もが望む宴に招くようなものでなければなりません。教会は強引な改宗活動によってではなく、『人を引き付ける』ことによって成長します」(『福音の喜び』14)。

こういう教会を目指して、信徒、修道者、司祭、司教は、共に歩んで行きましょう。そのために、聖霊の恵みを心から祈りましょう。

福岡、2020年5月17日

ヨゼフ アベイヤ